

## 二つの実学

會田 勝美

日本農学アカデミー副会長

2015年9月7日の日経新聞朝刊に、一橋大学学長の蓼沼宏一先生が書かれていたのだが、社会改善に実際に資する学問、社会に実りをもたらす学問である「真の実学」を大学は重視する、とのことである。実は一橋大学も社会科学、とくに経済学の分野で「実学」を目指しているらしい。ここでいう「実学」とは、日々の仕事や生活に役立つ実用的な知識やノウハウのことではなく、社会の直面する問題を発見し、解決するための知見を生み出す学問(真の実学)のことであると述べている。

それでは、日々の仕事や生活に役立つ実用的な知識やノウハウに関する実学は、どこが担当するのであろうか？これも社会にとっては大変大事なことのように見える。

私は東京大学農学部水産学科を卒業したのだが、農学や水産学は実学に属していたので実学とは何ぞやと長年考えてきた。東京大学の理学系学部や大学院の中でも、純粋科学を研究している理学部と原理の応用を目指す工学部や農学部がある。医学部は基礎医学と臨床医学に分かれている。我々に重要なのは臨床医学だが、基礎医学のほうが論文が書きやすいとのことで、どちらかというところらの研究者の方が研究業績が多い。また、純粋科学を志向している研究者の方が、実用化を目指す応用研究者の上に位置するような風潮があった。

事実、私も進学振り分け時には理学部の地球物理を志向していたが、1-2年時あまり勉強をしなかったこともあり点数が低く理学部には行かれず、仕方なく農学部の水産学科に進学先を決めた。やはり若い時は純粋科学にあこがれるようだ。先日、教養学部時代の同窓会があり出席したが、当時の組わけから理学部や医学部に進学した者が多かったが、大学の教員としては残ったのは、私だけだった。農学部に行ったことが、つまり純粋科学から実学に轉身したのが、私にとって良かったのかもしれない。

その後、私は東京大学を定年退職して東京農業大学にお世話になったのだが、その傍ら（独）日本学術振興会学術システム研究センターの農学主任研究員を非常勤で拝命し、科研費の審査員を選考するなどの仕事をしていて同じような感覚があった。例えば若手研究者が対象の学術振興会賞の予備選考にも携わっていたのだが、どちらかというとな**nature**や**science**誌に論文が掲載された者が選考されやすかったように思う。また医学分野では基礎医学の研究者の方が、臨床研究者より論文が書きやすい点で有利であったようだ。

東京農業大学では、東大農学部農業経済学科に在籍し、同時に初代の東京農業大学学長を務めた横井時敬先生の掲げた「実学主義」を教育理念に据えている。ここでいう実学とは、どうも日々の仕事や生活に役立つ実用的な知識やノウハウを指している気がする。どうも東大農学部は基礎を、東京農業大学は、実学を志向すると分けていた気がする。

現実に東京農大には醸造学科が現存し、全国の作り酒屋の7割ほどのオーナーはこの卒業生とのことである。東大農学部には農芸化学科があり、この教授であった坂口謹一郎先生はお酒の神様と呼ばれた人であったが、もはや日本酒では論文が書けなくなっている。最も、最近の東大農学部の研究者はあまり現場にいかず、そのため研究の足腰が弱くなっていると批判する方もいる。

東大農学部は学内の他学部の研究者と研究業績で勝負せざるを得ない。そうするとどうしても基礎研究に偏らざるを得ない。そうではなく、どうも一橋大学と同じく、社会の直面する問題を発見し、解決するための知見を生み出す学問（真の実学）を目指しているように思われる。そうすると実学には「二つの実学」があるように見えてくる。すなわち、日々の仕事や生活に役立つ実用的な知識やノウハウを目指す「実学」といわゆる「真の実学」と言われる二つの実学が。

私の専門の水産学の研究分野でも、大学、水産庁の研究所（その後、（独）水産総合研究センターになり、今年、国立研究開発法人となった）、県の水産試験場（現在は名変わっている所が多い）の3者があって、当初、大学は基礎研究をし、県の水産試験場が日々の仕事や生活に役立つ実用的な知識やノウハウを担当していたように思う。そのため水産庁の研究所のやるべき仕事が無いような状況が続いてきたように思うが、現在では、予算の制約もあり県の水産試験場が衰退してきたため、水産庁の研究所が、日々の仕事や生活に役立つ実用的な知識やノウハウに関する実学を担当しているように見える。もちろん実学に関する基礎研究もしているが。そうすると東大大学院の水産学専攻は純粹基礎研究ではなく、「真の実学」を目指すべきように見えてくる。

先年「ウナギの完全養殖」が水産庁の研究所で達成され、ウナギの「かば焼き」

が安く食べられるようになるのではと政治家も思い、国民にも期待されたが、これは間違いであった。つまり、安くはなく、百万円ほど出せば食べられるとのことである。「ウナギの完全養殖」の達成はサイエンスとして可能であったが、コストの面で事業化には大きなハードルがあるということだ。つまりこのことはサイエンスと事業化とに実学が分かれることを示している。「ウナギの完全養殖」(サイエンス)を達成したのが水産庁の研究所で、大学ではないではないかと思われるかもしれないが、実は「完全養殖」までは50年以上が経過しており、そのスタートは水産試験場・大学であり、その後の人材育成も大学が行ってきたのである。

私は、実学とは、日々の仕事や生活に役立つための学問とすると、まず社会の直面する問題を発見し、解決するための知見を生み出すいわゆる「真の実学」と言われる学問があり、その成果を踏まえて日々の仕事や生活に役立つ実用的な知識やノウハウの確立を目指す学問、すなわち「二つの実学」の連携が重要と思うのだが、いかがであろうか？